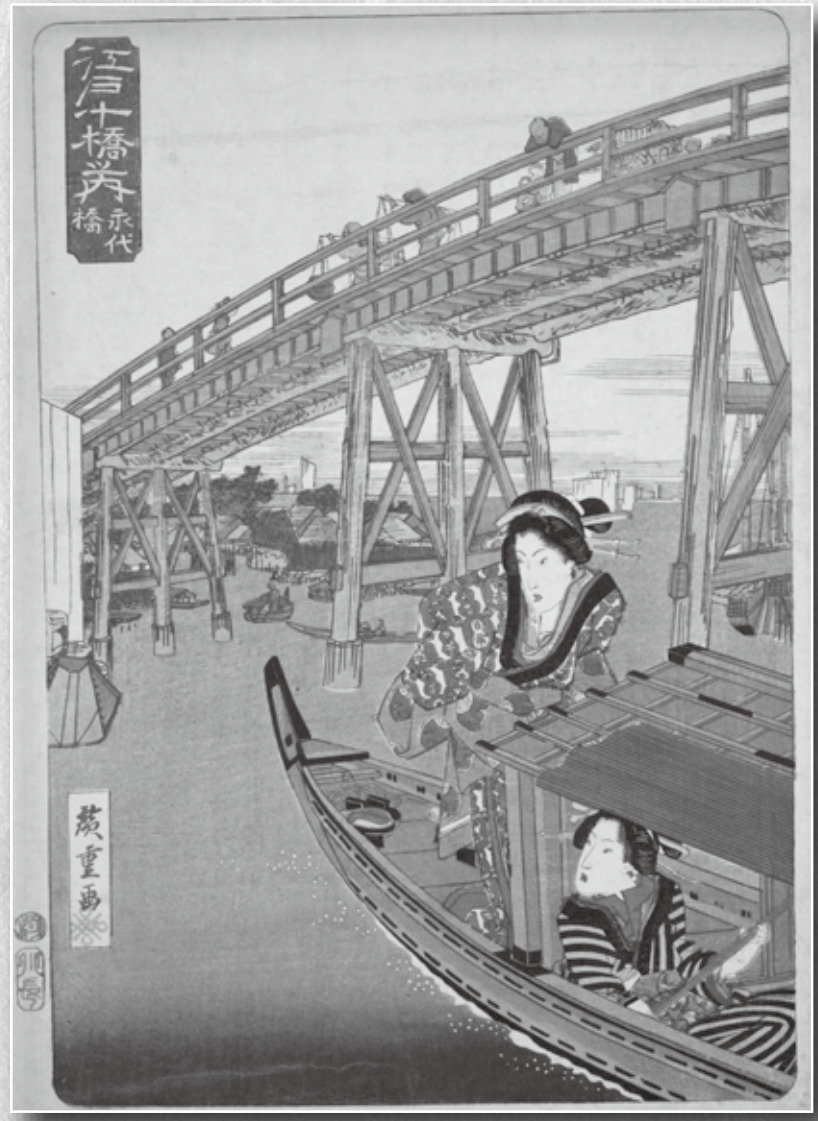
下町文化

NO. 280
2018.1.11

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

描かれた永代橋



広重「江戸十橋之内　永代橋」　国立国会図書館デジタルコレクション

○描かれた永代橋
隅田川河口と永代橋
○江東歴史探訪
深川淡交会と深川七福神
○深川江戸資料館企画展
「時代小説と深川」
○平成29年度芭蕉記念館後期企画展
明治維新と「俳句」
～正岡子規とその周辺～
○中川船番所資料館特別展　展示報告
「江東のウォーターフロント
～うつりゆく海岸線～」
○文化財まめ知識9
江東区内の百度石

隅田川河口と永代橋

江戸の町には、隅田川を起点とする水路が東西に分かれ、縦横（じゅうおう）に走っていました。物資輸送に水路を利用した当時にあって、運搬に適した都市であったといえます。永代橋は、隅田川の最下流に架けられた橋で、すぐ南には佃島がありました。錦絵（浮世絵）を見ると、その傍（かたわら）に関西方面をはじめ、日本各地から物資を運んできた大型廻船が停泊しています。ここで、廻船から艀船（はしけぶね）に物資を移し替え、江戸市中に運びこんだのです。そのため、永代橋のある隅田川河口部は、江戸への流通の入口として重要な役割を担っていたといえます。

さて、上の錦絵は初代歌川広重によって描かれた永代橋です。広重は、「東海道五十三次」などで知られますが、江戸の名所を数多く描いた絵師でもあります。この絵は、「江戸十橋之内」の一つとして、永代橋を取り上げたものですが、下から橋を見上げる構図で描かれています。橋裏の中央・両側に縦に3本の材木が貫かれていることもわかり、とても興味深いといえます。

次ページでは、永代橋の成立をはじめ、数点の錦絵を素材に、隅田川河口部周辺の世界について考えます。

永代橋の架橋

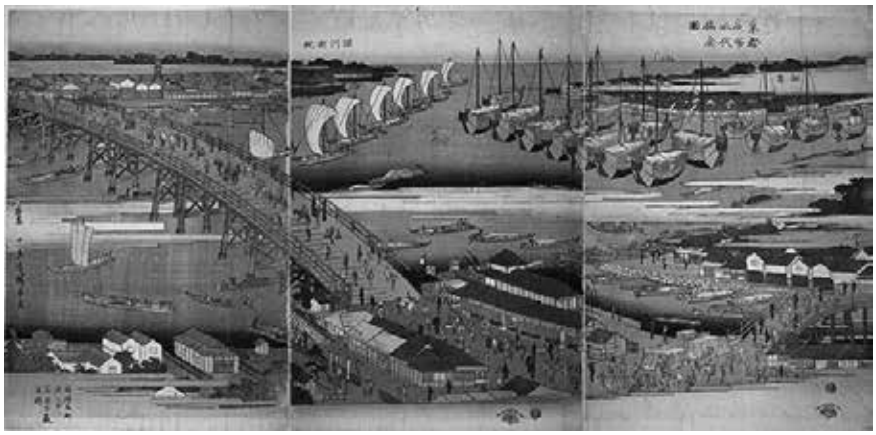
はじめに、永代橋が架橋された背景について考えてみることにします。

はじめて永代橋が架けられたのは、元禄11年（1698）でした。隅田川には、その時すでに千住大橋、両国橋、新大橋が架けられていたため、4番目の架橋でした。位置は、現在の永代橋より100メートルほど上流で、それまでは深川の大渡しがありました。徳川家康の時代、日光道中に架けられた千住大橋は別として、他の橋は、隅田川東部地域の開発を背景として順次下流に架橋されたといえます。

深川の発展

永代橋は、日本橋と対岸の開発地深川を結ぶ橋で、隅田川河口部に位置しました。

深川は、江戸時代に入ってから埋め立てられた土地が多く、河口部付近は、元禄12・13年に商業地としての開発が本格的にはじまったという土地柄でした。架橋の時期は、更なる発展に向かって、まさに土地整備に着手しようとしているときでした。隅田川沿いの一部地域や現在の門前仲町付近が、江戸時代の早い時期に陸地化していたことは、延宝8年（1680）の『江戸方角安見図』などからも明らかですが、その他の南部地域の河川・堀割や木場付近の多くの土地は、江戸中期の元禄期に整備された土地でした。



広重「東都名所永代橋全図」（国立国会図書館デジタルコレクション、以下同）

すでに、日本橋など隅田川西側は、埋め立てられ整備されていたため、幕府はその東側に新たな可能性を見出したと考えることができます。

では、架橋された永代橋は、どのように描かれたのでしょうか。

永代橋と佃島

右の錦絵は、深川の開発により整備された河口部を描いたもので、南に佃島、その傍には全国から物資を運んできた廻船が描かれています。また、左の錦絵は深川側から描かれたものですが、やはり永代橋越しに佃島と停泊する廻船を望むことができます。

このように、永代橋は、佃島・廻船とセットで描かれているものが少なくありません。この風景は、商品経済の発展により江戸が廻船の終着地となり、そこから艀船に移された物資が江戸の各所に運び込まれるという、全国各地と都市江戸を結ぶ、物資の結節点の役割を、この場所が果たしていたことを示しています。

国綱「永代橋の風景」（江戸名所之内）

また、永代橋自体も高く、『江戸名所図会』には、東南に開けた海、そして房総の山々、富士山、筑波山、上野の山、浅草寺まで眺めることができ、「風光さながら画中にあるがごとし」とあり、風光明媚な場所であったことがわかります。

ちなみに、佃島は江戸開幕以来、将軍家に白魚を献上する漁師町でした。夜間に篝火を焚き、集まった白魚を網で捕獲する風景を、広重は「名所江戸百景」のうちの一枚に描きました。「永代橋　佃しま」がそれです。この絵にも佃島の傍に廻船が見えますが、永代橋の橋脚が月夜に照らされるなか、白魚漁の篝火が焚かれています。同漁は、毎年11月から3月まで行われ、江戸の風物詩のひとつでもありました。

広重「永代橋 佃しま」
（名所江戸百景）

このように、永代橋とその周辺には、名所となりうる要素がいくつも見受けられます。橋を東に渡ると、名所として知られた洲崎弁財天もありました。

（文化財主任専門員　出口宏幸）

江東歴史探訪

深川淡交会と深川七福神

江戸・東京の正月の風物詩ともなった七福神めぐり、江東区域では深川七福神と亀戸七福神が良く知られています。亀戸七福神は、明治43年（1910）に刊行された『新撰東京名所図会』の東郊の部、亀戸町の萩寺（龍眼寺）を紹介する文章の中で、門前に「亀戸七福神布袋尊の標示あり」とあることから、少なくとも明治末年には設定されたことがわかります。

一方、深川七福神については、深川区域を対象とした『櫻東新聞』などから、設定された状況まで含めて、流れをつかむことができます。

深川七福神が設定されるにあたって、主体的な役割をになったのが、深川淡交会と名付けられた組織です。深川淡交会は、昭和9年（1934）11月20日に深川図書館内で創立されました。11月25日付の『櫻東新聞』には、「深川でオギャァと生れて、この方、年々に移り変る深川の多彩な姿態を色々の角度からざっと見つめて来た趣味性のゆたかな連中が秋の一夜の物語り」をしよう、という趣旨にて田村耕、石井敏雄の両名が幹事となって開かれたものです。

幹事となった田村耕と石井敏雄ですが、田村は深川不動堂門前の田村医院の院長を勤めていました。一方、石井は和倉町に住んでいて、地元では富士山研究家として知られ、昭和5年8月1日から7日まで、深川図書館3階にて蒐集物の展示会などを行っています。どのような仕事をしていたのかは不明ですが、『櫻東新聞』が蒐集物展示会の記事を掲載した際には、「日本アルカウ会幹事」という肩書きがつけられています。日本アルカウ会は、明治末年から大正にかけて全国各地で結成された徒歩会の一つです。

この二人を中心にして、活動を開始した深川淡交会には、三野村合名会社の重役で俳人でもあった田畑大蔵（千壺）、深川のうなぎ屋宮川の主人であった渡辺兼次郎（ペンネーム宮川曼魚）など、多くの知識人が関わりました。この淡交会の活動成果の一つとしてあげられるのが、深川七福神の設定です。

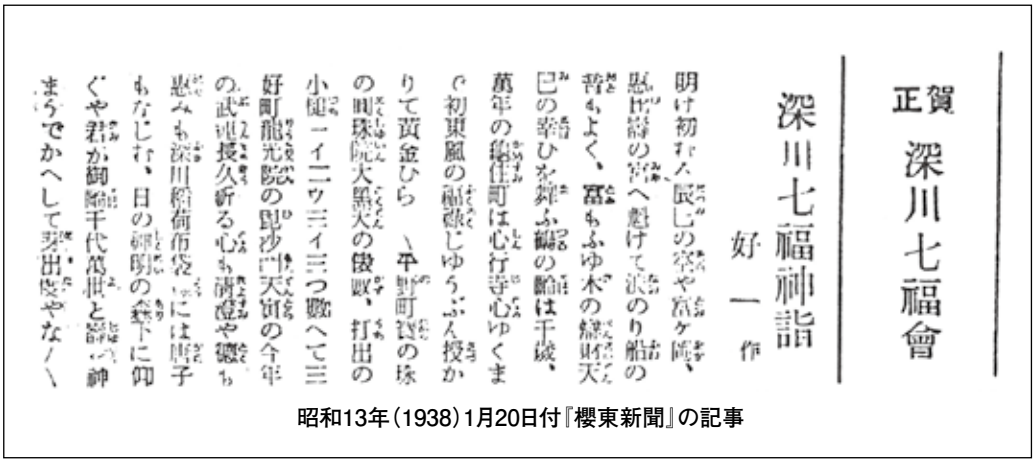
昭和12年の12月、石井敏雄の提唱によって深川七福会が結成されたことが12月30日付の『櫻東新聞』からわかります。この記事によれば、七福会の会長には田畑が選ばれ、事務所は冬木弁天堂に設置されました。そして翌13年の元旦早暁から七草までの間、朱印の受付や福守りの授与が行うとあります。記事にある七福神と所在地は次のとおりです。

恵比壽神	深川公園	八幡神社	
辨財天	冬木町	辨天堂	
大黒天	平野町一	圓珠院	
福禄壽	亀住町	心行寺	
毘沙門天	三好町三	龍光院	
布袋尊	清住町二	深川稲荷	
壽老人	森下町	天祖神社	

七福神めぐりをはじめた13年の12月8日には、田畑大蔵が持っていた布袋尊の開眼式が深川稲荷側の町会事務所にて開催され、三井寺としても知られる杉並区の眞盛寺住職が開眼供養の導師として呼ばれています。

このように深川の趣味人たちによって設定されたのが深川七福神であり、第二次世界大戦によって中断されるものの、昭和30年代には復活して、現在は深川七福神会として、深川2丁目の心行寺に事務局を置き、福をもたらす行事として受け継がれています。

（深川東京モダン館　副館長　龍澤潤）


正賀　深川七福會

深川七福神詣

好一　作

明け初そめ、辰巳の空や富ケ岡、
恵比壽の宮へ駕けて汐のり船の
背もよく、富もふゆ木の緑財天
巳の幸ひを辨ふ鶴の齢は千歳、
萬年の亀住町は心行寺心ゆくま
で初東風の福祿じゅうぶん授か
りて黄金ひら〳〵平野町一の塚
の圓珠院大黒天の俵踏、打出の
小槌一イ二ウ三イ三つ數へて三
好町龍光院の毘沙門天宵の今年
の武運長久祈る心も清澄や鏡ち
恵みも深川稲荷布袋には唐子
もなしに、目の前明の森下に仰
ぐや君が御齢千代萬世と辭ぶ神
まうでかへして茅出度やな！〳〵

昭和13年（1938）1月20日付『櫻東新聞』の記事

深川江戸資料館企画展

「時代小説と深川」

会期 11月14日(火)～平成30年11月11日(日)

深川江戸資料館の展示室は、江戸時代天保年間（1830～1844）の深川佐賀町の町並みや庶民の生活が再現展示されており、時代小説の作家やファンが訪れることがあります。

現在も多くの人びとに親しまれている「時代小説」。作家の池波正太郎は生前、「時代小説は早晩滅びるだろう」とよく口にしていたそうです。しかし、没後25年以上経つ今でも時代小説は人気を集め、書店へ行けば「時代小説」のコーナーがあります。その中には「深川」の文字が入っている作品も少なくありません。深川は、寺社や武家屋敷、川や橋が多く、庶民が暮らした町でもあり、時代小説の世界を感じることができるでしょう。

今回の展示では、時代小説の歴史とともに、深川を描いた作品とゆかりの作家、そしてその背景となる庶民の暮らしについて紹介します。

時代小説と歴史小説

時代小説と歴史小説は、一般的にほぼ同じ意味で使われていますが、時代の設定を生かし架空の人物や作者の思いなど虚構を重視したものを時代小説といい、歴史上の人物や事件などの史実に重点を置くものを歴史小説と考えられています。

時代小説の歴史

時代小説の源流は、江戸時代の歌舞伎や明治時代に出版された講談の速記本にあるといわれています。その嚆矢は、大正2年（1913）に「都新聞」で連載された中里介山『大菩薩峠』で、大正6年（1917）に連載が始まった岡本綺堂（おかもときどう）『半七捕物帳（とりものちょう）』とともに、今日の時代小説の礎を築いています。

そして戦後から現在にかけて、山本周五郎や司馬遼太郎、池波正太郎や藤沢周平などの登場により人気を博していきます。また、それまで書き手は男性が中心でしたが、杉本苑子や永井路子、平岩弓枝などの女性作家の進出は新たな読者を獲得しました。そして現代では、佐伯泰英が書き下ろし小説スタイルの先駆けとなり、時代小説の新しい流れが誕生しています。

深川を描いた作家と作品

山本周五郎は、下町もの、岡場所ものを多く書いた作家です。『しじみ河岸』や『ちいさこべ』は冬木町（①）や熊井町（②）が舞台となり、他にも辰巳の芸妓を書いた『ゆうれい貸屋』や深川の岡場所を書いた『五瓣（ごべん）の椿』（③）など多くの作品があります。周五郎は、浦安に住んでいた際に行徳と深川の高橋とを結ぶ定期蒸気船で勤めていた新聞社まで通っていたという縁があります。

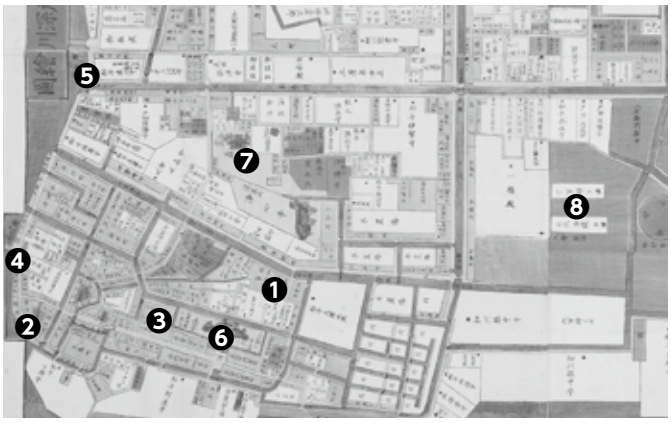
池波正太郎の作品には、現在でも人気のある『鬼平犯科帳』や『剣客商売』、『仕掛人・藤枝梅安（ふじえだばいあん）』などの中で、「深川・千鳥橋（ちどりばし）」といった深川ゆかりの地名をタイトルにしているものがあります。なかでも、『鬼平犯科帳』には永代橋（④）や万年橋（⑤）、富岡八幡宮（⑥）や霊巌寺（⑦）などが繰り返し場面として登場します。食通でも知られ、高橋の近くにあったどぜう屋の「伊せ喜」や馬肉屋の「みの家」のエピソードについて、エッセイで懐古しています。

藤沢周平の作品は、武家ものを始めとして、史実を重視した歴史小説や歴史上の人物を書いた伝記小説などがあります。とりわけ、本所深川地域が舞台となる市井物も少なくありません。その作品には、深川の地名や川、橋や寺社などの名前が詳細に書かれているのが特徴です。また、『彫師伊之助捕物覚え』や『用心棒日月抄（じつげつしょう）』などの作品には、深川地域が多く登場します。

他にも、明治5年（1872）生まれの岡本綺堂は、当時の風物や景色などを正確にちりばめながら、江戸の町を舞台に物語を展開しています。その代表作『半七捕物帳』の中には、深川十万坪（⑧）や深川八幡（⑥）の祭礼が出てきます。

また、深川地域には宮部みゆきや山本一力など、ゆかりの作家がおり、作品中に深川の町や神社などが多く登場しています。

今回の展示を通して、時代小説の歴史とともに、深川地域との縁や作品についてご覧ください。



「本所深川絵図」安政5年（1858）　作品の舞台となった位置を示しています。

平成29年度芭蕉記念館後期企画展

◆明治維新と「俳句」～正岡子規とその周辺～

平成29年12月14日(木)～平成30年4月22日(日)

平成29年（2017）は正岡子規（1867～1902）の生誕150年、平成30年は明治維新から150年という、それぞれ節目の年にあたります。近世から近代へと、日本の社会が大きく移り変わった明治時代に、子規も芭蕉や蕪村の句に注目しながら、「俳句革新」と近代俳句の確立を目指しました。

今回の企画展では、江戸の「俳諧」から明治の「俳句」への移り変わり、子規に影響を与えた俳人や門人たちの作品などを取り上げます。

(1) 子規の生涯と作品

子規は35年間の短い生涯で、約二万四千もの俳句を作りました。最初の句は明治18年（1885）、18歳の時に、友人の竹村鍛に宛てた手紙に書いたものとされます。

子規が生まれ育った松山は江戸時代から俳諧が盛んな地域で、子規は松山の俳人だった大原其戎（1812～89）から教えを受け、また内藤鳴雪・柳原極堂・高浜虚子・河東碧梧桐ら、子規と行動を共にした「日本派」の俳人たちも、松山の出身者が多くを占めていました。

(2) 「月並」の否定

子規は『病牀六尺』において、「月並」を次のように定義しています。

俗宗匠の作る句を「月並」という。月並の兼題で優秀作に景品を出していたものが、俳句の流行と共に広まって、俳句のことをよく知らない人々が参加するようになったので、このような連中が作る句を「月並調」と呼ぶようになった。（中略）俳句の俗宗匠が「ほそみ」（繊細を形象化した蕉風俳諧の美）などと称え、些細な下らないことを句に作って喜んでいるのは、「ほそみ」を誤解したものである。大きな景色などを詠んだ句は、面白くなくても俗には陥らないものだ。

「月並」とは「月次」ともいい、毎月行われる句会のことを指します。ここでは兼題（四季の季題）が前もって提示され、優秀作には景品が出たので、江戸時代末期から明治初期に庶民の間で大流行しましたが、作品のレベルは低いものでした。このような「点取俳諧」を主催していたのが「旧派」の宗匠たちで、子規は彼らを「俗宗匠」と呼び、その作品を低俗な「月並調」と断じました。

獺祭書屋俳話（明治26年）
明治25年6月から同年10月まで新聞『日本』に連載された俳論を集成したもので、子規の「俳句革新」の第一声と評価されています。

(3) 子規が目指したもの

子規の「写生」論は、洋画家の中村不折との交流を通して西洋画に学んだ結果、確立され、実際に「見て」俳句を作ることと、「智識」を排して「感情」を素直に表すことが重視されました。

子規によれば、江戸時代以前の俳諧は「写生を浅薄な事として排斥する」傾向にあり、「類似と陳腐を免れなかった」とされます。その一方で、西行や芭蕉のように「天然（自然）を写す」句を作れば、「天然の変化が類似と陳腐から救ってくれ、失敗が少ない」と評価しています。

子規は「俳句は文学の一部なり」と宣言し、文章を「うるさいまでも精密」に書くことを重視して、「どこまでも人にわかるように書かなくてはならない」と述べました。逆に「月並調」の俳句には「たるみ」（不要な言葉）が多いとし、その排除を目指しました。

(4) 日本派の俳人たち

子規が新聞『日本』の俳句欄を中心に展開した新派俳句の「日本派」は、内藤鳴雪・高浜虚子・河東碧梧桐などが参加し、明治30年（1897）に創刊した俳誌『ホトトギス』を機関誌としたことから、子規派・根岸派・ホトトギス派とも呼ばれました。

子規の没後は碧梧桐を中心として、『日本及日本人』の俳句欄に活動の場を移し、地方に俳句結社がつくられるなど、全国的な広がりを見せました。

(5) 明治の俳句結社

明治時代には、子規の他にも新派の俳人たちが多く登場します。特に、明治28年（1895）に角田竹冷らが設立した俳句結社「秋声会」は、毎日新聞の後援を得たため「毎日派」とも呼ばれ、尾崎紅葉や巌谷小波などが参加して、正岡子規らの「日本派」に対抗しました。

2月25日（日）の午後2時から、職員による展示解説（ミュージアムトーク）を行います。この機会にぜひご来館ください。

【芭蕉記念館　問合せ】
☎03（3631）1448

中川船番所資料館特別展　展示報告

「江東のウォーターフロント ～うつりゆく海岸線～」

平成29年10月25日(水)～12月3日(日)にかけて表記のテーマで特別展を開催しました。

【展示の趣旨】

江東区にあたる土地の面積は、明治15年（1882）には11・4㎢でした。それが135年後の平成29年には40・16㎢と3・5倍になりました。

江東地域は、土地の成立から今日まで拡大を続けてきました。それぞれの時代に開かれた臨海部、ウォーターフロントとはどのような経緯で、またどのような役割を担って生まれたのでしょうか。江戸時代を中心に探ってみましょう。

【北十間川沿岸　亀津村・高貝洲】

古代・中世の江東地域は「東京低地」に属し、隅田川・中川などもその流れを変えながら土地が形成されていきました。

江東地域の最初の土地は2千年前の亀戸に誕生しました。今の北十間川沿岸には砂洲状の土地が形成され、そこが亀津村と呼ばれる村落になりました。中川の河口部にあたるこの地域は、やがて漁業と湊としての役割を負うことになります。隅田川から現在の江戸川の間に広がる現足立・葛飾・江戸川・墨田・江東に当たる地域は、中世には在地領主の葛西氏が支配していましたが、葛西氏は自らの所領を守るため、領地を伊勢神宮に寄進し保護を求めました。その領地を葛西御厨（かさいのみくりや）と呼びます。図1に分布する村々のなかで亀津村は海と川筋をつなぐ重要な場所にあったことがわかります。

図1　葛西御厨図

北十間川こそ江東区最初のウォーターフロントであり、その形状が川筋として残されています。現在も亀戸にある寺社には、江戸時代より前の時代に創建されたところが数多く存在しています。

【小名木川が開かれる】

天正18年（1590）豊臣秀吉から関東一円を与えられた徳川家康は、城下町江戸の建設に着手し、隣接する房総方面から年貢米や塩などの物資が江戸へ輸送できるよう、小名木川を開削しました。

図2は小名木川の全長が描かれた最初の絵図と思われる「日本分国図」（正保国絵図写）です。浅草川（隅田川）と幾重にも蛇行する中川の間を結ぶ小名木川の南は、両端の半島状の土地があるだけで、海が迫っています。

しかし北岸には深川村ができ、開削から50年後には深川猟師町だった隅田川沿岸に材木置場が日本橋から移転、その東の永代島に富岡八幡宮が造営されて、後年江戸屈指の名所になりました。

図2　日本分国図（正保国絵図写）

【明暦の大火と江東の開発】

明暦3年（1657）の江戸に大きな被害をもたらした明暦の大火を契機に隅田川以東の開発が始まりました。小名木川に平行させて竪川を開き、それに交わるように大横川・横十間川を開削、並走する道路とともに街区を設定して旗本・御家人の屋敷町を形成しました。水害による武家地の撤退を経て元禄2年（1689）から武家の本所転入が始まり、同6年に完了したといいます。その年新大橋が架けられました。

この時期には、小名木川南東部に砂村新田が開発されました。宝六島（ほうろくじま）と呼ばれた微高地を拠点に、砂村新左衛門・同新四郎一族が、土地を開拓しました。

現清洲橋通りは、その南部に開かれ

た砂村新田成立前の海岸線であり、そこに新たに川を作って（埋め残して）新田への水路としました。その北側の既存の亀高村や治兵衛新田・大塚新田等の村落と区切ることから、「境川」と名付けられました。

砂村新左衛門が書き残した家訓（写本）では、「なるべく多くの種類の種を植えて育てること、木を育てておけば薪（たきぎ）や風除けの柵になる、堤に松を植えれば根が張って土手を補強できる」（意訳）などの教訓を残しています。

【木場の移転】

図3は元禄15年（1702）に板行された江戸図の一部。小名木川以南には入り江があり、西端の隅田川、東端の中川沿岸に南へと半島状の土地が描かれています。当時の地図は木版なので、板行年代と実際の状況に差が生じることがありました。本図の頃にはこの入り江は埋め立てられて、隅田川沿岸の「半島」から材木置場が新たに開かれた木場に移転が完了していたと考えられており、元禄12、13年頃の様子を描いていると考えられます。

材木置場の移転は、隅田川の河口部にあたるこの地域が、隅田川をはさんで上方から海で運ばれる商品、関東の川筋から運ばれる商品の集積地になっていくことが想定されることから、材木置場の移転が検討されて入り江の埋め立て・整備を経て移転しました。このことにより海岸線は格段に南下し、江東地域の土地が拡大、新たな埋立地の木場周辺に向けて、北から西から運河が延伸し、運河のネットワークが形成されました。

元禄11年（1698）に架けられた永代橋は、こうした木場の移転のための入り江の埋め立て、既存の運河の延伸による水路網の形成、隅田川沿岸の江戸物流の拠点化といった一連の施策を見越しての架橋だったのではないでしょうか。海浜の地にあたるこの場所に、東岸が半島状の陸地で貯木場と寺院というだけでは架橋の意義が弱いように考えられます。

図3　元禄15年江戸図

この木場移転は、貯木場が東に移動したというだけでなく、土地が拡大したことによって、木場の敷地内に材木問屋が屋敷を持ち、深川に本店を持つ材木商人を増加させました。彼らの多くは旧来からの熊野や木曽といった林産地を背景とした材木商ではなく、関東地方一円の川筋が、利根川の東遷や各河川の付け替え工事等で形成された関東の川のネットワーク「奥川筋」を背景にした関東周辺の林産地を商圏にした新興商人がその主力でした。

また材木産業の事情だけでなく、土地の拡大、運河の延伸によってもたらされた物資の集積機能の拡大は、「蔵の町・深川」の機能を高めることになり、小名木川から江東地域に入れば横十間川や大横川などの交差する運河、さらに並行する竪川・仙台堀にもつながって、物資を格納する場所も飛躍的に拡充しました。

木場が成立し、南東の隅に洲崎弁天が創建されました。5代将軍徳川綱吉の生母、桂昌院が江戸城内紅葉山で祀っていた弁財天を勧請したともいわれ、幕府の威信をかけて誕生した深川木場を海から守る、「折り紙付き」の神社として開かれました。

この段階で、江東地域の海岸線には、西から富岡八幡宮、洲崎弁天、そして砂村新田の鎮守、元八幡（現富賀岡八幡宮）と3社が揃ったことになります。いずれも江戸湊から房総、三浦半島方面まで遠望でき、元八幡への土手は桜並木でもありました。まさに木場の移転という経済政策が生んだ江戸の名所でした。

【永代通り以南】

幕末になって、アヘン戦争による清の敗北、日本への外国船の接近などから江戸周辺の防備が政策課題となります。越中島には調練場が設けられ、軍事訓練が行われました。大砲の発射訓練をはじめ、永代橋には銃を担いだ幕臣が行列をなして調練場へと向かうシーンを江戸の人も眺めることになります。

のちの時代の歴史を知っている私たちからすれば、相当に緊迫した情勢が現出していたのですが、浮世絵などからは、いまだに江戸の平和と繁栄を謳歌するかのような光景もまた描かれていました。

幕末の段階で、江東のウォーターフロントは、永代通りの南、古石場付近から越中島、東は南砂の南端付近までに及びました。こうした時点からさらに現代へ向けて、近代以降の江東もまた海岸線の南下を続けていくことになりました。

文化財まめ知識9

江東区内の百度石（ひゃくどいし）

「百度石」は、「お百度参り」のために神社や寺院の入口に設置された石柱です。

そもそもお百度参りは、神仏に特別な祈願をするにあたり、神社の境内入口から本堂・社殿の扉の前まで百回往復し、そのたびに神仏に参拝します。こうした参拝は、願いの重さを神仏へ伝え、かなえられることを切実に願う祈りです。参拝の目的は、病気治癒や開運出世などといった個人的な祈願に置かれました。

また七福神参り・三十三ヶ所巡礼・八十八ヶ所巡礼などが、多数の神仏に参拝するのに対し、お百度参りは一ヶ所の神仏に何度も参拝することを特色としています。お百度参りは、元々毎日続けて百度参拝する形式でしたが、後に一日で百度参拝する形へ変化しました。この場合、寺社の入口から拝殿や本堂までの間を百回往復する形であり、そのため目印として百度石が設置されるようになりました。ただし、境内の整備に伴い必ずしも入口に設置されていないものもあります。

現在、江東区では6件の百度石が登録文化財（有形民俗文化財）となっています。いずれも明治以降に設置されたものです。

城東地域の百度石

①百度石　昭和3年在銘
（亀高神社）

まず城東地域の百度石（2件）から紹介します。

亀高神社（北砂4）にある百度石には「昭和三年十二月吉日亀高町會」とあり、町会が奉納したとみられます。

現在は、境内の入口付近にあり、さらに百度石と刻まれている文字が朱色に塗られており、「お百度参り」の目印となるように設置されています。

②百度石　昭和13年在銘
（亀守稲荷神社）

また、亀守稲荷神社（北砂6）にある百度石も入口付近にあり、同様に「百度石」と刻まれている文字が朱色に塗られています。

深川地域の百度石

次に深川地域から2件の百度石を紹介します。

浄心寺（平野2）の百度石は、現在入口から離れた水屋の前にあります。しかし、以前の本堂は現在と比べて東側にあり、水屋に至る敷石が参道であったと言われています。

③百度石　昭和8年在銘
（浄心寺・奥にあるのが水屋）

その後、浄心寺の本堂などは戦災を経て現在の場所に再建されました。そのため百度石は移動していませんが、現在の本堂との位置関係からみれば、百度石は移動したように見えます。

さらに富岡八幡宮（富岡1）の社務所前にある百度石の背面には、四角形の穴があります。この穴はお百度参りの際に参拝した回数を数える（数取り）ための札・石などを置くために設けられたものです（実際に見学する際にはいたずらで石などを置かないようにしてください）。

なお、この百度石は銘文から関東大震災（1923）を契機に奉納されたと考えられています。

④百度石　大正12年在銘
（正面・富岡八幡宮）

⑤百度石　大正12年在銘
（背面・富岡八幡宮）

このように百度石は区内にそれほど多く残されていませんが、奉納者の願いが強くこめられた興味深い文化財と言えます。

皆様もお百度参りはしなくとも、寺社で見かけた時には百度石に注目してください。

（文化財専門員　功刀（くぬぎ）俊宏）

訃　報

江東区指定無形文化財（工芸技術）「木工（彫刻）」の保持者で、前江東区伝統工芸保存会会長を務められた岸本忠雄氏は、平成29年10月6日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。